

ハイデガーの思考と神話的世界 (1)

『哲学入門』を手がかりに

鎌 田 学

Heidgger's Thought and Mythological World (1)

An Interpretation of "Einleitung in die Philosophie"

KAMATA Manabu

はじめに

周知のように、ハイデガーは1934/35年にヘルダーリンの『ゲルマーニエン』、『ライン』についての講義を開始し、またこの時期以降ギリシアの悲劇詩人に関して多くを語るようになる。30年代半ば以降、ハイデガーがとりわけヘルダーリンに接近した事態を、ペゲラーは次のように解釈している。「ヘルダーリンはハイデガーにとって、逃れ去った神々の時代に神的なものの新たな転換を待つ詩人となった。ヘルダーリンの詩的な言葉は、存在の真理を経験しようと努める思考にとっての手がかりとなった」¹⁾。このペゲラーの見解に対して、本論も同意するに吝かではない。だが、ペゲラーの読みを確認するために、詩人と思索者の間に成立した親和性を細かに検討することは、さしあたり本論の関心の外にある。一連の論考が取り上げたいのは、むしろ、そうした問題以前のこと、すなわち『存在と時間』直後のハイデガーにおいて、ヘルダーリンとの出会いを可能にした土壌はどのようなものであったかということである。

この問題を考える際に、『存在と時間』刊行後になされた1928/29年冬学期講義『哲学入門』がきわめて重要であると思われる。というのも、そこでは、「神話的な世界観」が哲学の「起源」として明示的に語られ、存在するものの「神聖さ」ということが初めて言われているからである²⁾。

あらかじめ本論による解釈を大まかに言えば、次のようになる。ハイデガーは哲学を学から区別し、その固有性において規定することによって「神話的な世界」へと導かれる。そして、「神話的な世界」での存在するものの経験が、ハイデガーの思考において、存在するものの経験のモデルとみなされるのである。しかし、『哲学入門』において、哲学はいかなるものとして規定されたのか、さらに、そのなかで語られた「神話的な世界観」とはその内実からいってどのようなものであり、「神話的な世界」における存在するものの経験が範例と解釈され得る

理由はどこにあるのであろうか。

そこで以下では、1928/29年冬学期講義『哲学入門』を主な手がかりとしながら、これらの問いを一つずつ吟味し、30年代ハイデガーの展望をひらきたい。

本論は以下のように構成される。

1. 哲学，学，世界観
2. 世界観の二つの様式
3. 学の誕生と哲学の起源
4. 『アンティゴネー』の合唱歌解釈
5. ハイデガー 30年代の展望

1. 哲学，学，世界観

1928/29年冬学期講義『哲学入門』における哲学の概念に近づく手がかりを、その中で語られる「哲学は世界観である」という、一見奇異に思われる定式に求めることにしたい。

先ずは、『哲学入門』に先立つ1927年夏学期講義『現象学の根本諸問題』において、(学的)哲学は世界観(哲学)ではないというハイデガーの議論を見ていきたい。そのことで、逆に『哲学入門』に固有な問題設定が浮き彫りになると思われるからである。

ハイデガーが哲学と世界観とを区別する際の拠り所とするのは、「存在論的な差異」である。大づかみにいえば、前者は、「存在、その構造およびその諸可能性についての理論的、概念的な解釈」³⁾にかかわるのに対して、後者は存在するものに「実証的(定立的)」にかかわる。ここでいう世界観とは、「存在するものについての定立する認識、存在するものへ定立しつつ立場を取ること、しかも存在論的ではなく、存在的に」⁴⁾である。

存在問題に専らかかわる哲学を、存在的な世界観と同列におくことはできない。したがって、哲学は、その本質に従うかぎり、或る一定の世界観を形成することにその課題を認めてはならない。哲学は、せいぜい「一切の世界観形成に対して、実際また理論的ではなく、事実的かつ歴史的なそれに対して、根本的で原理的な関連を有する」⁵⁾にすぎないのである。

この講義において、哲学と世界観とを分け隔てる「存在論的な差異」は、哲学と、「非哲学的な諸学」とを区別する際にも適用される。後者は、「実証的な諸学」として「存在するもの、すなわち、そのつど一定の諸領域を扱う」⁶⁾。結局のところ、世界観と「実証的な諸学」とともに、「実証性(定立性)」という性格によって特徴づけられる点で、哲学とは位階を異にするものとみなされるのである。

ところが、こうした世界観および学に対する哲学の位置づけは、『哲学入門』になると変容を被ることになる。つまり、学と哲学との上述の関係が保持される一方で、「哲学は世界観である」といわれるのである。本論にとって関心があるのは、専ら哲学と世界観との関係である。だが、学と哲学についてハイデガーがこの講義で新たに加えた論点が、それを理解する際の前提となるので、これに少しだけ触れたいと思う。

学は、ハイデガーによれば、二重の限界をもつ。「① 学は、存在するものについての認識であって、存在についてのそれではない。② 学は、つねに必然的に、分割された領域としての存在するものについての認識であり、全体としての存在するものについてのそれではない」⁷⁾。先にみた『現象学の根本諸問題』において①はすでに指摘されていたが、②は明示的に語られなかった。哲学のみが、この存在するものの全体性へ目指していくという点が、新たな論点であることは明白である。以下ただちに示されるように、これが『哲学入門』での世界観の規定にも影響を与える。

さて、ここで世界観の最広義の意味を確定することにしたい。世界観という場合、ハイデガーは、「観 (-anschauung)」を現存在の一つのふるまいと解するが、もう一つの構成成分である「世界」をいかに理解しているであろうか。現存在は世界内存在として、「全体としての存在するもの」を超出する。この現存在の「超越」に着目しつつハイデガーは、「世界」の概念を次のように定義する。「本質上超越する現存在が、それにむかって超越するところのものを、われわれは世界と名付ける。(中略) 超出のそれにむかって (worauf zu) [世界] は、現存在がそうしたものとして己れをもちこたえる (sich halten) 場所である」⁸⁾。

このように、世界観とは、「全体としての存在するもの」に対して、現存在が「己れをもちこたえる」一定の仕方ということが出来る。しかし、こうした世界観の性格づけでもっては、先に述べた「哲学は世界観である」という言明の意味はまだ洞察されない。そのためには、世界観の意味をさらに限定する必要がある。

2. 世界観の二つの様式

ハイデガーは「世界観の二つの根本可能性」、すなわち「神話における世界観」と「態度 (Haltung) としての世界観」とを指示する。はじめに、前者の内実を明らかにしていきたい。

第一の世界観において、現存在が存在するものによって「統べられていること (Durchwaltetsein)」、存在するものに「ゆだねられていること」が強調される。これは、世界内存在の「被投性」という契機が支配的であることを意味する⁹⁾。

こうした世界観において出会われる存在するものの「圧倒的な力 (Übermacht)」に関して、ハイデガーは次のようにいう。「存在するものは、さしあたりその圧倒的な力においてのみ、しかも一貫して顕現する。現存在は、それに没頭し、様々な物だけではなく、全体によって奪い取られている」¹⁰⁾。「全体としての存在するものは、強力さ (Übermächtigkeit) という性格を有しているのである」¹¹⁾。

現存在は、その本性上、「支えのなさ (Haltlosigkeit)」によって性格づけられることができるが、ここでの「支えのなさ」といわれるものは、存在するものの「圧倒的な力」にゆだねられているという現存在の「守られていない状態 (Ungeborgenheit)」である。そこで、ハイデガーは、第一の世界観を以下のように特徴づける。「支え (Halt) は、存在するものにおける守り (Bergung) という性格をもつ。(中略) 支えは、強力な存在するもの自身の内に見い

出される。存在するものは、支えと守られている状態 (Geborgenheit) とを与えるものである」¹²⁾。

「守り」を「支え」として解釈し、しかも、存在するものの内にしかそれはないとしている点が、ハイデガーによるこの「神話における世界観」解釈の要点である。

次に、「態度」としての世界観をみることにしよう。この世界観の特徴は、「支え」を、「全体としての存在するもの」へと向かう現存在のふるまい自身の内にもつ点である。それ故、この世界観にあつては、ふるまいの諸可能性のなかへ己れをもちこたえることが、現存在にとって本質的になる。これは、世界内存在の「自己のために (Umwillen seiner)」¹³⁾ という契機が強調されることを示している。ハイデガーは、「態度」としての世界観が、存在するものとの対決であることを次のように表現する。

「そうした態度において、現存在の固有なふるまいは或る優位を獲得し、現存在は存在するものに対してふるまうことに意を注ぐ。その存在するものは、強力さという性格を失ってしまったわけではないが、すでに特殊な神話的制限、神聖さとしての強力さはなくなっている。しかし他方で、圧倒的な力へとかわる表立ったふるまいは、現存在の内部において、圧倒的な力との対決となり、しかもあらゆる本質的な連関においてそうなのである」¹⁴⁾。

以上、世界観の二つの根本形式を通覧した。本節の最後に次の二点を指摘だけしておこう。これらの理解において肝要なのは、両者を切り離すことができず、一方は他方に影響を与え、また他方は一方を先取りしているという点である、とハイデガーは言う。しかし、問題は、影響と先取りとをどのように了解するかにある。はたして、二つの世界観は両立するのだろうか。両立しないとしたら、どのようにして一方は他方を保持し得るのだろうか。これらの問題については、第五節で取り上げることにする。

第二に、現存在が「全体としての存在するもの」に曝されていること、および現存在が対決という仕方で存在するものに対抗すること、現存在のこれら二つの有り様は、第四節で示されるように、ハイデガーの『アンティゴネー』の合唱歌解釈を導く基本的な視座になる。

3. 学の誕生と哲学の起源

前節が示したように、第二の世界観においては、「支え」は現存在において生起する。現存在が、「全体としての存在するもの」へと「態度」をとることは、それ自身、存在するものとの対決である。対決は、「直前にあるもの」に対しては「支配する」という仕で行われる。「存在するものそれ自身へとふるまうことが決定的になり、存在するものの強力さの乗り越えになる。その際、この存在するものそれ自身が、現存在によって、現存在の支配へともたらされるという仕方でそうなるのである。たとえ、特に形成されそしてそうしたものとして概念把握された学が、まだ全く問題になっていないとしても、存在するものへとふるまうことは、～へとふるまうこと (Verhalten zu) として、それが何であるかと如何にあるか (was und wie) とをあらわにすることをねらう」¹⁵⁾。

したがって、この対決する態度によって規定された現存在には、存在するものは「克服され、支配され、統制されるべきもの」¹⁶⁾として現れ出る。その限り、存在するものの「強さ」が、現存在によって乗り越えられることになる。すでに明らかなように、存在するものへの抵抗によって特徴づけられる学が成立し得るのは、この「態度としての世界観」においてである。

他方、哲学の成立次元に関してはどのように考えるべきであろうか。ハイデガーは、それについて以下のようにいう。「態度としての世界観に、つまり、存在するものとの対決に、存在問題、すなわち、われわれが哲学することと名付けたものの覚醒が、必然的にひそんでいる」¹⁷⁾。したがって、哲学は、「態度」としての世界観とともに生じる。これが、『哲学入門』における哲学についての新たな定式の意味である。

以上のように、学と哲学は、ともに「態度」という世界観において成立する（だからといって、もちろん、両者が同一レベルにあるわけではない。だが、二つの性格づけの講論にはここでは立ち入らない）。しかしながら、「態度」としての世界観が、哲学の「起源」¹⁸⁾であると考えすることはできない。なぜなら、前節で触れた「態度」としての世界観の生成論によれば、「守り」としての世界観から「態度」としての世界観が生成する限り、「態度」は「守り」によって制約を受けているからである。したがって、哲学の「起源」をいうとき、それは「神話的な」現存在における、存在するものの経験にまで遡らなくてはならない。存在するものに囲まれて存在する「神話的な現存在」が発する、存在するものへの問いの性格について、ハイデガーは次のようにいう。「彼らの問いは、存在するものの根源的な始まり (Uranfang)、存在するものの根源的な歴史 (Urgeschichte)、始原 (ἀρχή) へと向かう」¹⁹⁾。ここでいわれている「根源的な始まり」は、存在するものへと「対決しつつ製作する態度」が問う「始原」とは区別されねばならない。後者は、「構成されているものの何から (Woraus)、元素 (Urstoff)、また、何によって (Wodurch)、根源的な力 (Urkraft)」²⁰⁾ という意味での「始原」にはかならない。したがって、ハイデガーが提示する「神話的な現存在」の問いが、ソクラテス以前の哲学者やプラトンのそれと、たとえ彼等の問いが神話的な要素をまだ含んでいるとはいえ、異なることは明らかである。

本節の検討によって、哲学を規定するハイデガーの思考が、哲学の生成論というべき枠組みの中を動いていることが見通せるようになった。それは、哲学という「態度」を単に現在の視点からではなく、その「起源」からの生成というかたちで論じる。ここに、哲学の本質を歴史と相関的に把握しようとするハイデガーの意図がはたらいっていることは一目瞭然である²¹⁾。

4. 『アンティゴネー』の合唱歌解釈

この時期のハイデガーにとって、「神話的な世界」における存在するものの経験が、その範例とみなされていること、この点に本論は「はじめに」で言及した。それが範例たる所以をさ

しあたり二つ指摘できるのである。

先ず、きわめて形式的に考えれば、神話が「態度」としての哲学の「起源」という身分を与えられているからである。なるほど、「実証的」な認識にほかならない学もまた、その固有の仕方、すなわち存在するものを「直前に置かれたもの」として経験する。だが、学のような存在するものへの接近は、存在するものへの学以前のふるまいに基づいている以上、学による存在するものの認識はあくまで制限されたものにすぎず、これを存在するものについての経験の範例とみなすことはできない。第二に、「神話的な世界」における存在するものの経験が、ハイデガーの真理論という枠組みの中で十全に機能しているからである。もちろん、この第二の論拠を具体的に示すことが肝要であり、本節ではそれを試みる。

はじめに、現存在の「守られていない状態 (Ungeborgenheit)」と「隠れなさ (Unverborgenheit)」としての真理との連関について、ハイデガーが以下のように記述していることに注意したい。

「存在するものの隠れなさは、種別的な意味において、存在者において〔現存在の〕守られていない状態、ないしは守りの気遣いにおいて守られていない状態に定位している。守られていない状態と隠れなさとのこうした本質連関を、種別的な神話的な世界内存在において明確に見渡さない限り、ひとは神話の種別的真理を解釈するのに十分な手引きをもつことはないだろう」²²⁾。

存在するものが現存在に「圧倒的な力」として現れ出ることが成立するためには、現存在はその「圧倒的な力」にさらされ、「守られていない状態」にあるのでなければならない。しかし、「守られていない状態」と「隠れなさ」との本質的なつながりに関する議論を、『哲学入門』は展開してはいない。そこで、1935年夏学期講義『形而上学入門』でのハイデガーによるソフォクレスの『アンティゴネー』中の合唱歌解釈に即してそれを考えてみたい。

ハイデガーは合唱歌冒頭 (332-333) を次のように釈義する。「不気味なもの (das Unheimliche) は多くある。だが、何物も人間を越えてそびえつつ、活動するいっそう不気味なものはない」²³⁾。

人間が「不気味なもの」のうちでまさに「最も不気味なもの」というわけであるが、それは次の理由においてである。「制圧するもの (das Überwältigende)」にほかならない「全体としての存在するもの」のただ中に、現存在は曝されている。「全体としての存在するもの」は、確かに「不気味」にちがいないが、しかし現存在は「暴力活動的なもの」として、故郷的な慣れ親しんだものの限界を越えて、「制圧するもの」という意味での「全体としての存在するもの」に立ち向かう、まさにこの故にである。

こうしたハイデガーの解釈は、先にみた『哲学入門』で示された図式と基本的に重なり合うように思われる。第一に、「全体としての存在するもの」が「制圧するもの」とみなされ、現存在はそれにゆだねられている。これは、現存在が「守られていない状態」であると言えることができる。第二に、現存在はこの「制圧するもの」に対抗して力を行行使する点であるが、『ア

ンティゴネー』解釈では、この力は、「知」という意味での *τέχνη* とされている。ハイデガーは *τέχνη* を次のように性格づける。「以前には閉鎖されていた存在を、存在するものとしての現れ出るものへと、知の働きによって戦い取ること」²⁴⁾。

しかし、『アンティゴネー』解釈の眼目は、人間は「制圧するもの」との対立の中に置かれつつも、力を行行使する人間に「破滅」が必ず訪れるという点である。人間の無力がさらけだされる。「至る所へ人間はおのれに軌道をつくり、存在するもののあらゆる領域、制圧する支配のあらゆる領域の前へ人間は敢て進み、しかもその際あらゆる軌道からはじきだされる」²⁵⁾。よって、「故郷的なもの (das Heimische)」への一切の連関から投げだされた人間は、つねに「不気味なもの」にとどまらざるを得ないのである。

以上のような合唱歌解釈の背後に、現存在の「守られていない状態」にもとづく真理論がひかえていることは疑うことができない。人間が「故郷的なもの」の外に置かれることによって初めて、「故郷的なもの」が開示される²⁶⁾。それと同時にまた、「不気味なもの」、すなわち「制圧するもの」としての「全体としての存在するもの」も現出する。「したがって、不気味さの生起において、全体としての存在するものが開かれる。この開きが、隠れなさの生起である」²⁷⁾。

5. ハイデガー 30 年代の展望

本論は、30 年代中葉以降、ハイデガーのヘルダーリンへの接近を可能にしたものを明らかにする目的で、『哲学入門』にそくして、哲学の新たな規定、神話における存在するものの経験、そしてその真理論的な意義についての論述を試みた。結論を言うためには、本論に続く一連の論考を待たねばならないが、本論を締めくくるにあたり、これまで十分に言及されなかった点などを補足し、続稿のための展望をひらきたい。

第三節でも言及したように、哲学を「態度」としての世界観と規定する『哲学入門』議義が採用するパースペクティヴは、ソクラテス以前の哲学者よりも一層古い「神話」に始まりを求める。常識化した哲学史は、この「ミュトス」を「ロゴス」と対立するもの、「ロゴス」によって破壊されるものと理解するが²⁸⁾、ハイデガーはむしろ「ミュトス」の内に、「圧倒的なもの」としての存在了解を積極的に見い出すのである。言うまでもなく、「全体としての存在するもの」を「圧倒的なもの」として受け取る経験は、存在するものの全体を「直前にあるもの」、「製作されてあるもの」とみなす経験と位相を異にする。前者こそ、悲劇『アンティゴネー』が示す経験内容にほかならない。そして、この経験のうちに、「神聖さ」としての存在了解が根づいているのである。

『哲学入門』において、哲学が「態度」として規定されるわけだが、このことのうちには、ハイデガー固有の或る問題、すなわち、〈哲学の使命〉という問題が伏在しているように思われる²⁹⁾。なぜなら、ハイデガーは哲学の本質を次のように語るからである。「哲学の本質は以下の点にある。すなわち、哲学は具体的、歴史的に、態度によって規定された現存在のため

に、突入する余地を形成するという点である。よって、哲学は、根源的かつ正確な意味において、到来的である³⁰⁾。ここで「突入する余地」といわれているものを、「具体的な歴史的状況」³¹⁾へのそれと本論は解釈する。したがって、哲学することによって、現存在はその置かれた歴史的な状況へ参入するようになり、こうした参入を準備するという意味で、哲学は「到来的なもの」なのである。

このようにハイデガーは、哲学の遂行を、現存在の歴史的な状況への「跳躍」とただちに結び付けることによって、＜哲学の使命＞を現存在の「歴史性」との連関において語ろうとしている、この点は明らかである。また他方で、本論がすでに確認したように、神話における世界観が哲学の「起源」とするハイデガーの議論は、哲学の成立とともに失われたこの「起源」の確保という問題を内包している。ハイデガーによれば、存在するものの神話的な経験を哲学が「想起」することによって、哲学はその「起源」にかかわりあうのである。「神話は哲学にとって本質的な想起である」³²⁾。

したがって、哲学することは、すぐれて、「到来」と「既在」二つの面に定位していることになる³³⁾。すなわち、哲学は「到来的なもの」として、現存在が歴史的な状況へ参入することを準備する。他方において、「態度」としての哲学は自身の「起源」を「想起」によって確保する。このことから、『哲学入門』講義は、哲学することを歴史との相関において捉えようと構想されたことがわかる³⁴⁾。

しかしながら、こうした構想下での『哲学入門』講義が、問い残した問題はないだろうか。存在するものの経験モデルを、たとえ「想起」を経由して「神話的な現存在」に求めたとしても、哲学は「態度」として、つまり、存在するものとの対決として可能であるならば、そのモデルを哲学のなかに同化することは原理的に拒まれているはずである。そうであるならば、ハイデガーが『哲学入門』講義で示した、「圧倒的な力へとかわかる表立ったふるまい」としての哲学は、「神話的な世界観」と相いれないものを、それ自身のうちに初めから蔵していることになる。本論はここに、この講義が提示した哲学規定の問題点を認めるのである。これは、ハイデガーが哲学することを現存在の「態度」として定着させ、この「態度」を現存在の「自己のために」という契機に帰してしまったことに由来する。その結果、存在するものとの対決という名の下でのみ、哲学することが理解されたのである。

それでは一体、ハイデガーによる哲学することの規定を、「神話的な世界観」と両立するものへと近づける道は残されていないのだろうか。そうではない。それは、実を言えば、本論ですでに示されたことのなかにあるのである。『アンティゴネー』の合唱歌解釈によってもたらされた、「知」という力を行使する人間が結局は「破滅」という考えを受け入れてみよう。人間の無力さを認めてみよう。『哲学入門』講義でなされたような、哲学することを現存在の「自己のために」という契機のもとに置くのをもはや放棄し、哲学することをいわばもっと＜弱いもの＞にするのである。どんなに力を奮って「あらゆる領域」に進み出ても、人間には「破滅」と「災厄」がふりかかってくる以上、哲学することに「力」を与えることは徒労以外

のなにものでもない。したがって、哲学することには「全体としての存在するもの」に「対抗する力」を与えないで、哲学を〈弱い〉ままにしておくのである。

本論がこうした道を提案するということは、余りにも牽強附会な解釈であるように見えるかもしれない。しかし『哲学入門』講義以降のハイデガーが、哲学を〈弱くする〉道を歩んだことに疑いの余地はない。「思考 (Denken)」(もはや哲学ではない) とは何かを問う文脈で、「あらゆる感謝 (Dank) は、何よりもまずそして最終的に、思考の本質領域に属している」³⁵⁾と語り、「感謝」することの根源的な意味を、思考を促すものに「己れを負っていること (Sichverdanken)」³⁶⁾とハイデガーが言うとき、明らかに思考を、思考されるべきものとの対立や対抗を脱した、いいかえれば、その〈弱い〉側面で捉えているのである。

このような展望の下、続稿では、『哲学入門』講義以後の30年代ハイデガーを追跡し、論考の終局の問題である、ハイデガーとヘルダーリンとの出会いの条件を検討したいと思う。

註

引用文献は以下のように略記しページ数を付す。また、[] による補い、強調はすべて引用者とし、原文のそれは尊重しない。引用ということですので強調されていると思うからである。

SZ ; SEIN UND ZEIT, Max Niemeyer, 1927, 16. Aufl., 1986.

GP ; Die Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe Bd. 24, Vittorio Klostermann, 1975

EP ; Einleitung in die Philosophie, Gesamtausgabe Bd. 27, Vittorio Klostermann, 1996

EM ; Einführung in die Metaphysik, Gesamtausgabe Bd. 40, Vittorio Klostermann, 1983

WH ; Was heisst Denken?, Max Niemeyer, 1997

1) Pöggeler ; Der Denkweg Martin Heideggers, Neske, 1990, S. 216.

2) 「神聖さ」は、ヘルダーリンの詩解釈においては、次のように特徴づけられる。「神聖なもの、〈神々を越えて〉、人間を越えて、〈時の移ろいよりもいっそう古い〉。昔のもの、つまり、すべてに先立つ第一のもの、そしてすべての後から来る最後のものは、すべてに先駆けるものであり、すべてを自身のうちに留保するものである。すなわち、原初的なものであり、そうしたものとしてとどまっているものである」(Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung, Gesamtausgabe Bd. 4, Vittorio Klostermann, 1981, S. 73.)。ハイデガーによると、ヘルダーリンの言葉はこの「神聖なもの」を言いあてることに向かうのである。

3) GP. S. 15.

4) ebd.

5) GP. S. 13. 哲学が具体的なあれこれの世界観形成に対して、「原理的な関連を有する」という点は、『哲学入門』も一致する。「哲学することはそれ自体、或る世界観を模範的に、主題的に打ち立てることでもなければ、或る世界観を明言することでもない」(EP. S. 397.)。

6) GP. S. 17.

7) EP. S. 224.

8) EP. S. 307.

9) 「カッシーラー書評」のなかで、ハイデガーは端的に次のように言う。「神話的な現存在は、なによりも、被投性によって規定されている」(Kant und das Problem der Metaphysik, Gesamtausgabe Bd. 3, Vittorio Klostermann, 1991, S. 267.)。

10) EP. S. 357.

11) EP. S. 308. 「強力さ」という存在性格がここで語られている点に注意したい。カッシーラーが「マナ(強力さ)」表象を、神話における現実的なものの「如何に」として分析したことをハイデガーは評価して

- いる。Vgl. Kant und das Problem der Metaphysik, S. 266.
- 12) EP. S. 359-360.
- 13) 『存在と時間』における「自己のために」は、「そのうちで、現存在が到来的に、本来的にであれ非本来的にであれ、己れへと到来する図式」(SZ. 365) のことであつた。ポイントは「己れへと到来する」ということであり、『哲学入門』でもこの点は保持されている。
- 14) EP. S. 368.
- 15) EP. S. 381.
- 16) EP. S. 368. この発想の延長上に、後年語られる「技術」の問題が位置しているように思われる。「集立 (Ge-stell) とは、用立てるという仕方で現実的なものを対象としてあらわにすることへと人間を立てる、すなわち、挑発するあの立てることを取り集めるものをいう」(Die Technik und die Kehre, Neske, 9. Aufl, S. 20)
- 17) EP. S. 382.
- 18) 「起源」という語は『芸術作品の起源』では次のように定義されている。「(ここでは) そこから、そしてそれを通して、或る事柄が何であり、如何にあるかであるところのかのものを指している」(Holzwege, Gesamtausgabe Bd. 5, Vittorio Klostermann, 1977, S. 1)。しかし、『哲学入門』では「起源」に明確な意味を与えていない。
- 19) EP. S. 384. 「根源的な歴史」に関して、ハイデガーが次のように言っている点に注意したい。「存在するものの世界進入が、根源的な歴史そのものである。この根源的な歴史から、われわれが今日しだいにはっきりと近づきはじめて一つの問題圏域、つまり、神話の問題圏域が展開されねばならない。ミュトスの形而上学が、この根源的な歴史から了解されねばならないのである (以下略)」(Metaphysische Anfangsgründe der Logik, Gesamtausgabe Bd. 26, Vittorio Klostermann, 1978, S. 270)。
- 20) EP. S. 385.
- 21) 第五節参照。
- 22) EP. S. 362.
- 23) EM. S. 155. この箇所翻訳としては、例えば次のようなものがある。「この世界には、実に驚嘆すべきものがある。そのなかで人間よりもいっそう驚嘆すべきものはない」(SOPHOCLE 1, LES TRACHINIENNES, ANTIGONE, texte établi par A. Dain et traduit par P. Mazon, Les belles lettres, 1955, p. 84)。また、本文が示すように、ハイデガーは「不気味さ (Unheimlichkeit)」を「故郷的なものから外れること (Unheimischkeit)」と関連づけて論じている。前者は後者に由来する。
- 24) EM. S. 169. これは「芸術」としての $\tau\acute{\epsilon}\chi\eta$ に通底する性格づけにほかならない。なお、「芸術」が $\tau\acute{\epsilon}\chi\eta$ であることは次の理由による。「すぐれた意味における芸術は、作品における存在を存在するものとして存立と現れへともたらすが故に、芸術は作品のうちに置きうること (Ins-Werk-setzen-Können) そのもの、 $\tau\acute{\epsilon}\chi\eta$ とみなされてよい」(EM. S. 168)。
- 25) EM. S. 161.
- 26) 「故郷的なもの」から逃げ去っている人間にとって、「固有なものにおいて、故郷的なものになること (Heimischwerden)」とは、「他なるものを通過すること」にほかならない。この「通過」は、「故郷的なものから外れること」の経験として解釈できるであろう。Vgl. Hölderlins Hymne >Der Ister<, Gesamtausgabe Bd. 53, Vittorio Klostermann, 1993. S. 60.
- 27) EM. S. 176. これは「形而上学とは何か」の次の周知の箇所を想起させる。「不安という無の明るい夜のなかで、存在するものそのものの根源的な開きがはじめて生起する。すなわち、それは存在するものであって、無ではない」(Wegmarken, Gesamtausgabe Bd. 9, Vittorio Klostermann, 1976, S. 114)。
- 28) Vgl. WH. S. 6-7.
- 29) この<哲学の使命>というモチーフは、初期フライブルク期に表明された「覚醒状態の形成」としての解釈学に由来すると思われる。「ハイデガー初期フライブルク期における解釈学の生成について」(工学院大学共通課程研究論叢 第35-2号, 1997, p. 1-14) 参照。
- 30) EP. S. 398.
- 31) EP. S. 400.
- 32) EP. S. 398.

- 33) 「現在」はどのように位置づけられているかといえば、「瞬間の先端」であり、「瞬間」は「到来的な想起から力と豊かさとを受け取る」(EP. S. 398)とされ、重視されていない。この点から、ハイデガーが「現在」重視の思想に対して距離をとっていることが読みとれる。
- 34) この講義で取り上げる予定のテーマには、哲学が歴史にどのように関係するか、という問題が含まれていたが、この問題に立ち入ることなく講義は中断された。
- 35) WH, S. 94.
- 36) WH, S. 93.

付記 本稿は日本学術振興会特別研究員としての研究成果、および文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(本学非常勤講師)